

新たなかすりの作り手

生産者・消費者の減少に伴い、かすり産業は厳しい状況が続いています。独立をする作り手には、分業制ではなく「ひとりで全ての作業を行う者」も増えてきています。新しい時代のニーズを追い求める作り手の夢を紹介します。



たいら ともこ とも工房

宜野湾市出身で、家の近くで織子の仕事を募集していたことがキッカケで織子となった平良さん。後継者育成事業にも参加し、南風原では15年間、織子として経験を積みました。織子が続けるうちに、自分で全てをやりたい！という思いから3年前に独立。今では全ての作業をひとりでこなしています。「かすりの柄がかすれて可愛い！と思いかすりを始めてみただけで、実際自分でやってみると難しい作業ばかりでした。この難しさが私の興味をそそり、気づいたら夢中になっていました。」と教えてくれました。「若い人や男性にも着てもらえるようなかすりを作ることが今の目標で、自分なりに男性の視点に立ちながらもの作りをしています。将来は自分で着るかすりを織れたらいいな〜。」と夢を語ってくれました。

若者、男性が
着たくなるような
かすりを追いかける



かすりの需要が一番多かった頃、生産者達は分業制を活かして、同じ商品を早く、たくさん作っていました。かすりがファストファッションを目指していた、といえるかもしれません。しかし日本が欧米型の社会へ変化し、社会が豊かになっていくとともに、着物本来の価値を見いだす機会は減っていきましました。同時に、かすり生産者は高齢化が進み分業制が立ちゆかなくなっています。

2020年、かすりの岐路と言えるでしょう。

そのような中、紹介した若手の生産者たちを中心として、新たなかすりの道が模索されています。

新たなかすりの道は、「量で消費につなげる」のではなく「人同士の繋がりや消費につなげる」つまりこれまで以上に「本当に必要とされているも

南風原のかすり ～人と人をつなぐ～

のを作る「ことが求められています。そのためには、かすりブランドのコンセプトを確立し、顧客のニーズに高いレベルで応え、つないでいくことが重要です。単なる分業制の継続ではなく、進化させ、職人たちが全体を消費者の嗜好に合わせて深くコーディネートしつないでいくことが解決につながるでしょう。

また取材した生産者のように、全ての工程を職人一人が中心となって、一貫して生産することにより、消費者の嗜好に合わせた強いブランドをプロデュースすることも必要かもしれません。

伝統を守るために続けていくこと、時代に必要とされるものへ対応していくこと、どちらもかすり文化を守るためには大切なことです。

生活環境が大きく変わるいま、「かすりを愛する者」が切磋琢磨し合い、変化していくことが求められているのではないかと感じました。

TEORI WORKS OKINAWA 宮城 まりえ 麻里江さん

北谷町出身で、南風原町に嫁いだことをキッカケに元々興味があったかすりを始めた宮城さん。後継者育成事業や、工房での技術習得を経て今年独立。かすりの代表的な柄「トウイグワ」を花織りで表現するなど、斬新なデザインから古典的なかすりまで幅広く手がけています。「お客さんと近いものづくりをする人になりたい。」と語る麻里江さんの作品は、ワンピースやコートなど若者が着たくなるようなデザインで、沖縄でも着れるような軽い素材を使用するなど、かすりを気軽に身につけられるような工夫が施されていました。「昔とは違って物が溢れている今、昔と同じ事を続けるだけでは残っていけない。物が溢れている中で選ばれないといけない。伝統のものを作りつつも、今の時代にあったものを作れるのひとなりになりたいです。かすりの間口を広げるキッカケ作りがしていきたい。」と夢を語ってくれました。



かすりコラム

あの頃かすりは凄かった!!

南風原の織物の生産が本格的になったのは、大正から昭和の初め頃で、昭和五年には生産・検査・販売の強化目的から「南風原織物組合」が結成されました。その頃、規模の大きな組合工場を①照屋(第一工場)、②本部(第二工場)に設立、③宮平には金森工場、④山川には秋山工場と民間の工場も設立されました。その後工場は戦争で焼失しますが、技術者のかすりへの情熱が再び南風原町をかすりの産地として復興させました。

昭和五十年は生産のピークで、反物の年間生産量は6万反。令和元年度の反物の生産量が1,459反なため、今とは比べものにならない活気だったことが数字だけでも分かります。かすりの生産が盛んだった頃、染色職人は爪が藍で染まるため、飲みに出かけると「あんた儲けやだね〜一緒に飲もう!」と爪を見た人から声をかけられることが多かったそうです。

※写真 昭和五十三年南風原村勢要覧より



工場のあった場所

- ①第一工場 照屋368番地
- ②第二工場 本部178番地6
- ③金森工場 宮平670番地
- ④秋山工場 名幸橋付近

二代目 大城 一夫 (大城廣四郎工房)

工房を仕切る二代目の代表。元々は、大城さんの祖母がかすりを始め、その伝統を家族で守ってきた名高い工房です。「かすりは分業制で、昔から種糸と、かすりづくり、染色は『男の仕事』織りは『女の仕事』と言われていて、家族の手伝いをする中で作業を覚えていきました。私の父、大城廣四郎は男の中でも珍しく『織り』が上手な人だったよ。父からは、『良いものを作りたなら、いい色が必要。色の勉強をきなさい。客は

見た目で商品を選ぶため、見た目に出る色がとても大切だ。」と何度も言われたよ。」と教えてくれました。そんな父の影響もあり、大城さんは藍が好きで「いいものを作るときは藍染めを作れるよ。科学染料は調合でいろんな色を作れるが、藍染めや草木染めは自分で求めていく物が出ない。そのとき出た色を使うことが面白さのひとなんだよ。だから染め色を大切にしているよ。」と教えてくれました。

藍染め

藍にはいろいろな種類がありますが、沖縄で使用されるものの殆どは「琉球藍」です。沖縄にしか生息しない珍しい藍で、製造までに時間がかかるため、県内外からも人気が高い染めものです。工房では泥藍(泥状になった藍の色素)を水に溶かし、藍染めの原液を作っていきます。「藍は生き物なので、毎日空気に触れさせることが大切。綺麗に染まる状態になると、あいな(写真参照:真ん中に藍が集まっている状態)が咲くんだよ。染まる状態になったかは、アルカリ性の度合いで決まるから、私は手で触ってヌルヌルする感覚を確かめるよ。」と大城さんは教えてくれました。



また、藍染めは空気に触れることで、色が浮き出してくるため常温で染め、空気に触れさせる作業を何度も行います。一方、草木や化学染料を使った染めの場合、100度まで温度を上げて染めることで糸が染まるようになります。

色を大切に かすりの職人